



2020年度 第2回 瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
瀬戸内海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2020年7月～8月)のポイント

(1) 概要：

シラスの漁獲量は紀伊水道東部・大阪湾で平年を上回り、それ以外では平年並みか下回る。
カタクチイワシ（小羽から大羽）は平年を下回る。

(2) 海域別：

紀伊水道東部のシラスは不漁であった前年、平年を上回る。

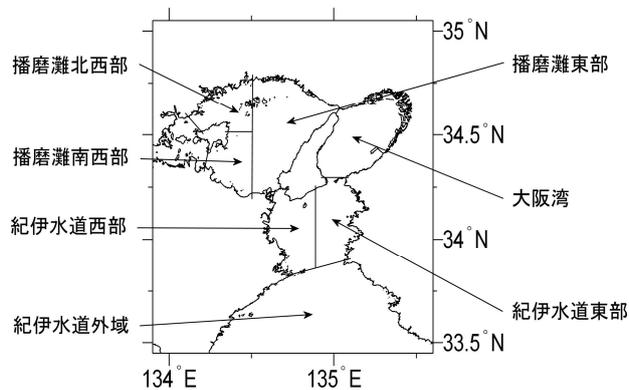
紀伊水道西部・播磨灘北西部のシラスは前年同様平年並み。

大阪湾のシラスは前年、平年を上回る。

播磨灘東部のシラスは平年並みであった前年を下回る。

播磨灘南西部のシラスは不漁であった前年を下回る。

大阪湾のカタクチイワシは不漁であった前年を上回るが、平年を下回る。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所
担当：業務推進部 加藤、齊藤
資源生産部 本田、河野
電話：0829-55-3406、ファックス：0829-54-1216
当資料のホームページ掲載先URL
<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

2020年度第2回瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

1. 今後の見通し（2020年7月～8月）

シラス（本年夏季発生群）

紀伊水道東部では不漁であった2019年、平年を上回る。

紀伊水道西部・播磨灘北西部では2019年同様平年並み。

大阪湾では2019年、平年を上回る。

播磨灘東部では平年並みであった2019年を下回る。

播磨灘南西部では不漁であった2019年を下回る。

標本漁協、もしくは標本船のシラス漁獲量を各海域の指標とした（図1～図3）。

カタクチイワシ（小羽から大羽）

大阪湾では不漁であった2019年を上回るが、平年を下回る。

標本船の漁獲量を指標とした（図4）。

シラス、カタクチイワシのいずれも2010年～2019年の平均値を平年値とした。

2. 漁況の経過（2020年4月～6月）及び今後の見通し（2020年7月～8月）についての説明

(1) シラス漁況

紀伊水道東部（和歌山県側）では5月の漁獲量は前年の34%、平年の48%であった。

紀伊水道西部（徳島県側）では5月の漁獲量は前年の11%、平年の15%であった。

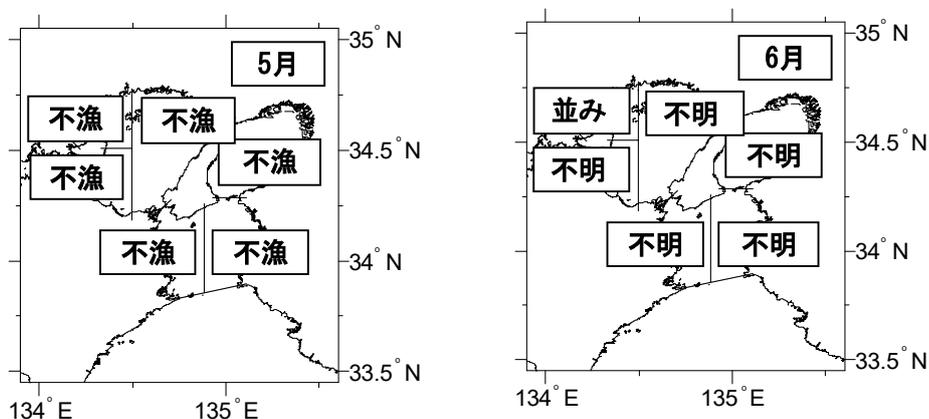
大阪湾（大阪府）では2020年の漁は前年より7日早い4月30日から始まった。5月の漁獲量は前年の25%、平年の25%であった。6月上旬以降、漁獲量は増加傾向である。

大阪湾（兵庫県）では2020年の漁は前年と同様、5月7日から始まった。5月の漁獲量は前年の22%、平年の25%であった。

播磨灘東部（兵庫県側）では2020年の漁は前年より8日遅い6月1日から始まり、5月の漁獲量はなかった（前年68トン、平年68トン）。

播磨灘南西部（香川県側）では2020年の漁は前年より3日早い5月20日から始まった。5月の漁獲量は前年の47%、平年の38%であった。

播磨灘北西部（岡山県側）では2020年の漁は前年より5日遅い6月1日から始まり、5月の漁獲量はなかった（前年0.7トン、平年0.4トン）。6月の漁獲量（6月1日～11日までの合計）は前年の77%、平年の104%であった。



2020年5月～6月のシラス漁況

(2) 産卵量

紀伊水道外域東部では5月は前年の82%、平年の19%、紀伊水道東部では5月は前年の1175%、平年の94%であった。大阪湾では5月は前年の1108%、平年の293%、6月は前年の493%、平年の296%であった。播磨灘では6月は前年の189%、平年の77%であり(図5)、播磨灘東部では前年の174%、平年の144%、播磨灘北西部では前年の879%、平年の91%、播磨灘南西部では前年の69%、平年の8%であった。

(3) 黒潮流路の現況と今後の予測

6月10日現在、黒潮は大蛇行流路で推移しており、都井岬沖でかなり離岸、足摺岬沖、室戸岬沖、潮岬沖で著しく離岸している。各岬における黒潮離岸距離の変動傾向と水産研究・教育機構運用の海況予測システムFRA-ROMSの予測結果を併せて考慮すると、紀伊水道沖の黒潮は6月後半から8月までは、蛇行の移動に伴い一時的に接岸することはあるものの、概ね離岸で推移すると予測される。

(4) 今後の見通し

シラス(本年夏季発生群)

紀伊水道東部では外海発生群及び内海発生群が漁獲されていると推定されるが、今後の漁況は主に内海発生群に左右されると考えられる。本漁期に黒潮は離岸傾向で推移すると予測されており、また紀伊水道外域東部における産卵は低水準である。しかしながら、紀伊水道東部における産卵は平年並み、大阪湾での5月～6月の産卵量は2019年、平年を上回っていることから、不漁であった2019年、平年を上回ると考えられる。

紀伊水道西部でも外海発生群及び内海発生群が漁獲されていると推定される。7月～8月の漁獲量は6月の紀伊水道西部と播磨灘(徳島県海域)の水温が低いほど多くなる傾向があり、播磨灘(徳島県海域)よりも紀伊水道の影響が大きい(図6)。紀伊水道西部における10m層の平均水温は2019年同様平年並み(-0.5℃以上、+0.5℃以下)、播磨灘(徳島県海域)では2019年同様平年より高め(+1.0℃より高く、+1.5℃以下)であった。大阪湾での6月の産卵量は2019年、平年を上回っているものの、水温条件は良くないことから、2019年同様平年並みと予測される。

大阪湾では外海発生群が春から引き続き漁獲されるのに加え、内海発生群が6月以降にシラスとして漁獲されるようになる。黒潮は離岸傾向が続くと予測されており、今後の外海発生群の漁獲はあまり見込めない。しかしながら、大阪湾での5月～6月の産卵量は前年、平年を上回っていることから、2019年(大阪府:不漁、兵庫県:平年並み)、平年を上回ると考えられる。

播磨灘東部では内海発生群が漁の主体であり、6月の水温が低いほど7月～8月の漁獲量が多くなる傾向がある(図7)。播磨灘全体での6月の水温は2019年同様平年よりやや高め(+0.5℃より高く、+1.0℃以下)であった。また産卵量は2019年を上回っているが、平年を下回っている(図5)。したがって平年並みであった2019年を下回ると予測される。

播磨灘南西部も内海発生群が漁の主体である。当該海域の産卵状況から判断すると、不漁であった2019年を下回ると考えられる。

播磨灘北西部も内海発生群が漁の主体である。当該海域の産卵状況から判断すると、2019年同様平年並みと考えられる。

カタクチイワシ(小羽から大羽)

大阪湾では漁期当初に2019年発生1歳魚、その後は2020年の春シラス漁で漁獲の対象となった0歳魚が小・中羽として漁獲される。大阪湾の2020年1月～4月における1歳魚の漁獲量は2019年、平年を上回った。しかし、2020年の春シラス漁では5月の漁獲量が平年を下回っており、7月～8月にカタクチイワシとして漁獲される0歳魚については少ないと推察される。これらのことから不漁であった2019年を上回る

が、平年を下回ると考えられる。

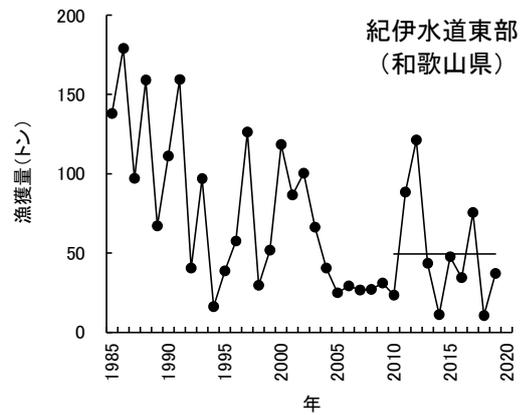
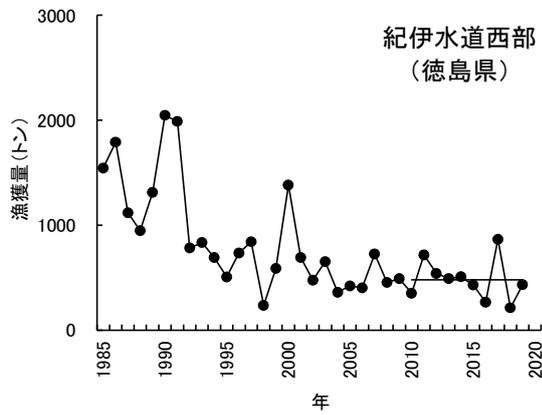


図1 紀伊水道の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

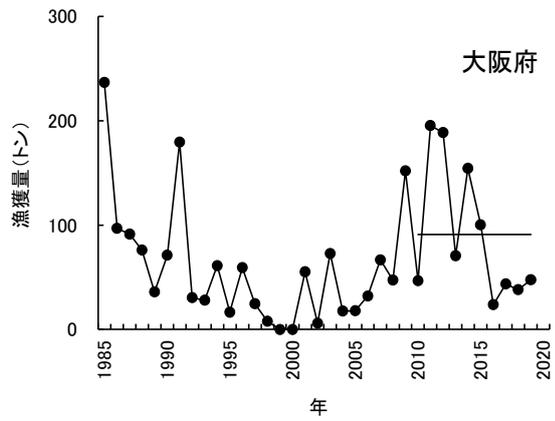
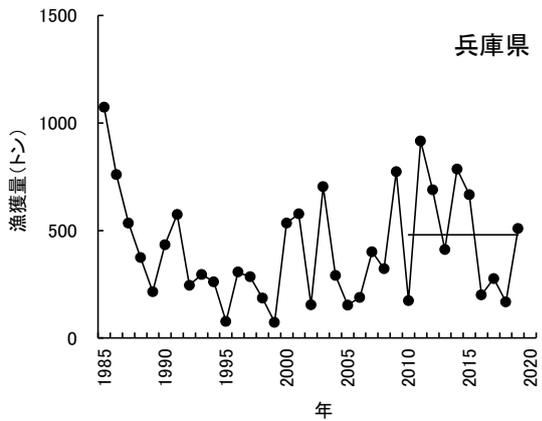


図2 大阪湾の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

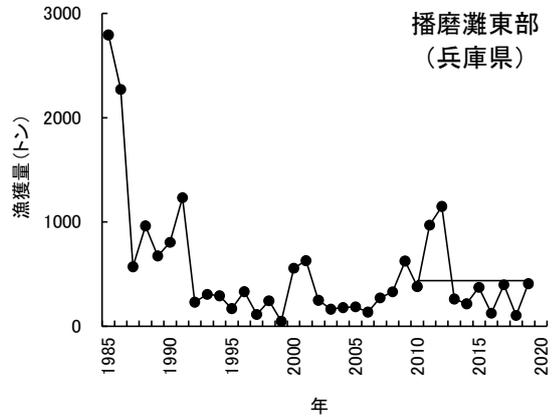
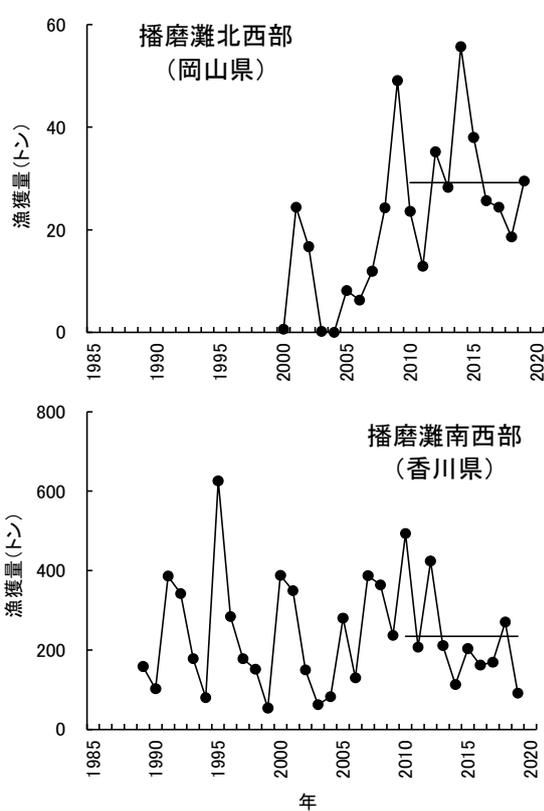


図3 播磨灘北西部の標本船、東部及び南西部の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

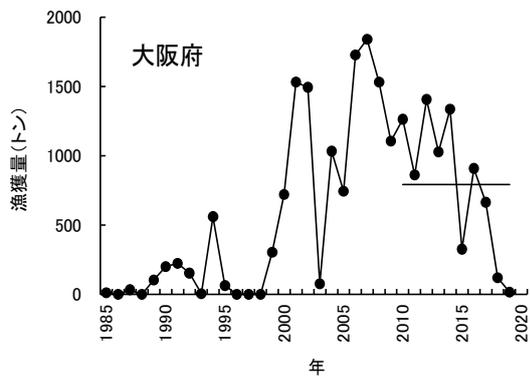


図4 大阪湾の標本船における7月～8月のカタクチイワシ漁獲量（実線は平年値）

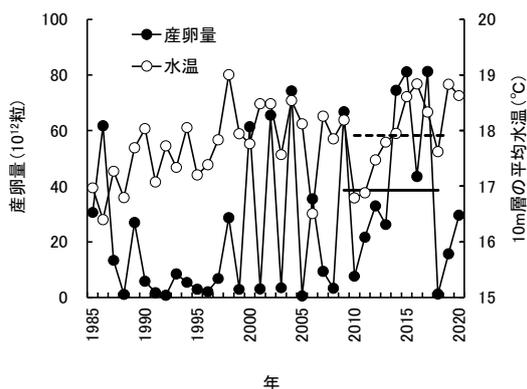


図5 播磨灘における6月の産卵量と10m層の平均水温（実線は産卵量、点線は10m層の平均水温の平年値）

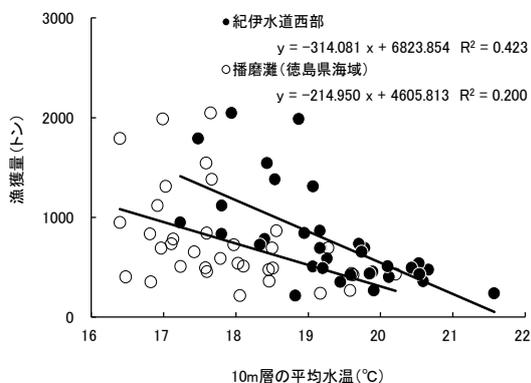


図6 紀伊水道西部及び播磨灘（徳島県海域）における6月の10m層の平均水温と紀伊水道西部の標本漁協におけるシラス漁獲量の関係

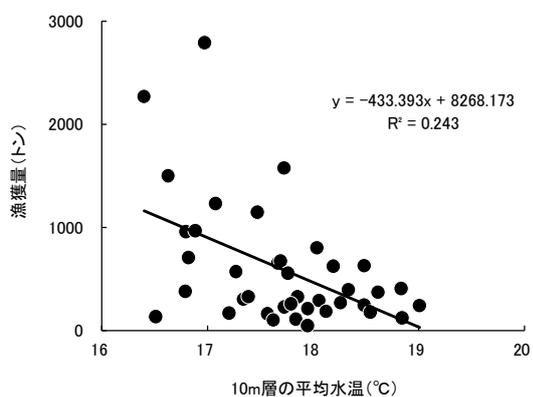


図7 播磨灘の6月における10m層の平均水温と播磨灘東部の標本漁協におけるシラス漁獲量の関係

参 画 機 関

<p>和歌山県水産試験場</p> <p>地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産技術センター</p> <p>兵庫県立農林水産技術総合センター 水産技術センター</p> <p>岡山県農林水産総合センター水産研究所</p> <p>香川県水産試験場</p>	<p>徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課</p> <p>国立研究開発法人 水産研究・教育機構 中央水産研究所</p> <p>(取りまとめ機関)</p> <p>国立研究開発法人 水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所</p>
--	---